

【胸糞注意】 『差別』 と
『区別』 【完結】

ファンネル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

博麗霊夢は、村人たちからの相談を受けていた。大きな虫の化け物が、人里の村を破壊し回っているので何とかしてほしいとの相談を。

久しぶりにスペルカードルールの伴わない仕事が出来たかと、霊夢は封殺用の霊札を持って相談のあった村へ向かうのだった。

目次

後編 前編

--	--

23 1

前編

深夜のある森の中、一人の男が松明を明りにし、森の中に入って行く。

その男は小綺麗な衣服を身に纏っているが、顔は黒く髭は手入れがなされていなかった。その事が男の出で立ちを劣らせているようにも見える。

男がしばらく歩いてみると、少し空けた場所に出た。そこは小さな泉があり、蛍が儂い光を出しながら踊っている。幻想郷でも屈指の幻想的な風景と言えるだろう。

しかし男の興味はそこには無かった。

男はおもむろにあちこちを見渡し、何かを探している。そして、とうとう目的のモノを見つけたようだ。

「ギ……ギギ……」

男の足元には、木の根元を掘り出した巣穴のようなものがある。その奥からなんとも言えない鳴き声が聞こえてくる。

男は巣穴に手を入れ、そこから目的のモノを掴みとると一気にとりだした。

「びい……ぎい……」

「へへへ。マジで気持ち悪いな、こいつ等……」

男は醜悪な笑みを握られている物に向けた。

男の手に握られているのは虫の幼虫だ。ただの虫じゃない。その幼虫は芋虫のような形をしており、大きさは男の掌に収まりきれない程の大きさをしている。

この幼虫は虫の妖怪の幼虫だ。

今はまだ幼体で掌サイズだが、これが生体になると人間ほどの大きさに変わり、他の獣たちを捕食するようになる。

男はその幼虫をそこらに放り投げ、再び巣穴に手を突っ込んで同じように他の幼虫たちを取りだしていく。

全部で5匹の幼虫が男の手によって巣穴から引きずり出された。

「びい……びい……」

突然、巣穴から出されて幼虫たちは困惑しているようだった。

帰省本能なのか知恵があるのかは解らないが、幼虫たちは男から逃げるように巣穴の中に戻ろうとする。

だが、幼虫たちが巣穴に戻る事は無かった。

グチャツ！

突然、気持ちの悪い音が男の足元から発せられた。

男は虫妖怪の幼虫を踏みつぶしたのだ。

即死だっただろう。辺り一面に、幼虫の体液がばら撒かれ、幼虫の何匹かにも体液がかかった。

幼虫たちは、大急ぎで男から離れようとする。

妖怪の幼虫だけあって、危険を察知する知恵はあるようだ。だがまだ幼い幼虫の姿では、人間の男の歩く速さには勝てない。

「おいおい、逃げんなよ。これからが楽しいんだからさ」

男は幼虫たちを蹴飛ばし、巣穴から遠ざけた。体の柔らかい幼虫では男の蹴りでも脅威だった。

「び……び……び……」

蹴り飛ばされ、唸りながら幼虫たちはそれでも男から離れようとする。

この男は危険だ。何故かはわからないが、自分たちを殺そうとしている。そのように幼虫たちは考えていた。

男は、幼虫の一匹に、燃え盛る松明を近づけた。

「ギッ…ピギギギギッツツツ!!!」

炎の熱を受けた幼虫は、唸りながら体をうねる。しかしそれでも炎は消えない。

炎は幼虫の皮を破り、中の肉を炙る。肉は溶けだし、体液と混ぜあつてドロドロの液体になり外に溢れだす。その痛みは想像を絶する痛みであろう。幼虫はしばらく苦しみなから、とうとう動かなくなった。

男は他の幼虫たちに対しても、同じような残酷な方法で殺害して行つた。そしてとうとう幼虫は全滅してしまつたのだつた。

この幼虫は確かに妖怪だ。

しかし人間を襲うような危険な存在と言えばそうではない。むしろ人間を恐れ、自ら関わろうとはしない妖怪だ。

成長し、成体となってもそれは変わらない。食す分だけ獲物を狩り、時期が来たら産卵に相応しい場所を見つけて、そこで子を産む。子供を残した後、成体はその場を去って死を待つ。

妖怪と言えど、その種類は千差万別。

この虫たちのように、ただ虫から妖怪に変わっただけの存在だっている。その結果、ほんの少し普通の虫よりも強くて賢くなっただけで、後は普通の虫と変わらなかつたりする。寿命だつてほんの数年足らずだ。

ならばこの男の凶行はどういう事か？

なんて事は無い。ただ単に男は何かを殺してみたかったのだ。ただそれだけの理由だつた。

男はここからすぐそばの村に住んでいる。男はここが妖怪がいない森だと言う事を知っていた。この森は虫妖怪たちの産卵の場。虫がうろつく澄んだ湖が存在し、なおかつ外敵が存在しないため産卵にはもってこいの場所だつたのだ。

男がそれを知つたのはつい最近の事だつた。

人間を襲わない、関わらない——そんな妖怪たちの場であつたために村人たちもコレ

と言つて今まで感心を示さなかつた。

だが男は、その虫妖怪と言うのがどういふ妖怪なのか興味があつた。そして探してみれば、なんて事は無い。ただ単に普通の芋虫を何十倍に大きくしただけの存在だつた。

その時、男の中で何かが呟いた。それは男自身の心だつたのか、『こんな妖怪だつたら俺一人でも殺せるんじゃないか?』等と考え出したのだつた。

そして今回の凶行に走つた。

実際に殺した男が感じたのは果てしない幸福感だつた。

命は大切な物。粗末にしてはいけない。そんな道徳観念に反する背徳感に男は酔いしれていた。

それどころか、人間に仇なす危険な妖怪を自分は殺したのだと、罪悪感ではなく達成感に覆われていた。

まるで自分は英雄になつたみたいだと、男はとてもスッキリした顔で森から去つていく。

その男の凶行を目撃したモノはいない——淡い光を放ち踊り続ける蛍たち以外は………。



博麗神社に珍しく人盛りが起きていた。

しかしお祭などと言う陽気な雰囲気は何処にもない。皆、ところどころ傷を負っていて、切羽詰まった様子だった。

「——何があったの？」

霊夢は、村の代表らしき人物と話をしていた。

代表は何かしらの依頼で来たようだった。

「はい。突然、村に虫の妖怪の集団が現れ、人間を襲い始めたのです。幸い、死者は出ておりませんが、けが人が多数出る被害を受けました」

「虫の妖怪？」

「はい。不思議な事に、家畜や畑には一切手を付けず、家を破壊し回り、人間に危害を加え始めた……いいえ、それも少し違いました。人間を襲うと言うよりも、何かを探して

いたような……そんな感じを受けました。我々もただ黙って家を壊されるわけにもいかず、反撃に出たのですが……」

「それで、やられたと言うわけね」

「はい……」

「ふん……」

霊夢は少し違和感を感じていた。目の前の男に対してではない。その件の虫の妖怪の事だ。

幻想郷の妖怪たちの種類はそれこそ千差万別だ。話しの通じる妖怪もいれば、言語を解せず、限りなく野生に近い妖 怪もいる。

そして、そう言った野性に近い妖怪たちは、何かの目的意識にとらわれず、生物としての本能で動く事がほとんどだ。

今回の件——畑も家畜も荒らさず、人間たちの家を破壊し回り、何かを探している。明らかに目的に沿っての行動している。詰まる所——今回の件には背後で糸を引いている奴が存在すると言う事だ。

だが、それでも分からない。意思を持つ妖怪が何故、幻想郷のルールを破ろうとするのか……。

人間を襲う事は禁じられている。

もしそのルールを破ったらどうなるかくらい、そこらの妖精にだって解る筈だが……。

まあ、今それを考えた所でどうしようもない。まずは現地に行つてゆつくりと調べようと、霊夢は考えた。

「分かったわ。まずは貴方達の村に行くとしましよう。それでもし本当に人間に危害を加えるような奴だったら討伐しますから」

「おおー！ ありがとうございます！ 博麗の巫女様ー！」

これは久しぶりにスペルカードルールに則った戦いではなくなるかもしれないと、霊夢は封殺用の札を多量に持ち、村人たちの案内で件の村へと行く事になった。



件の村に到着した霊夢は目を見張った。

家と言う家がすべからく破壊されている。聞いていた情報よりも酷い有様だ。

しかし、驚いているのは霊夢だけじゃなかった。いや、むしろ霊夢よりも村へ案内していた者たちの方がよっぽど驚いているように見える。

「ど、どういう事だ……これは……」

一人がそう呟いて、力が抜けたように膝をついた。

その時、村の方からこつちに駆け寄って来る者たちが居た。どうやらこの村の村人のようだ。

「村長！ 戻って来たのですね！」

「これは一体どういう事だ!? 何故ここまで村が壊滅している!?!」

「村長たちが出かけた後、しばらくしてまた虫の妖怪どもが襲ってきたんです！ 途轍もなくでかい虫だった！ 鋏を出したり、糸を吐き出したり——あんな化物見た事がないー！」

「落ち付け！ 死んだ者は？ けが人はいるのか？」

「いいえ、死者はいません。怪我をした奴らも大した事のない軽傷で済んでいます。ただ……」

「ただ？」

「村長、あなたの所の長男が虫たちに連れさられました……」

「なに……ツ!？」

「虫たちは、あなたの長男を捕まえた後、森の中に……」

村人たちが狼狽している最中、霊夢は他の所に注意をしていた。

村長が言うように、家畜のニワトリや畑は荒らされた形跡は何処にもない。ただ、人家だけが被害を受けている。

おまけに人間を攫うという行動。普通の野性の妖怪では決してない。

コレで確定的だ。

何かが背後にいる。明確な意思を持った何かが……。

「博麗の巫女様！　お願いします！　せがれを……せがれをどうか助けてやってくださいー！」

「ええ。無事だったらもちろん助けるわ。ただ……万が一の事も考えておいて」

「そ、それは……分かっていきます。ならば、その時はせめて亡きがらだけでも……」

「分かったわ——確か、森の方だったわね。後は任せて」

「よろしくお願いします」

霊夢は村長たちとの話しを終え、森の中に入って行った。

森の中は、なんと言うか、一言で言ってしまうと、平和な森だ。魔法の森のように瘴気が充満しているわけでも、有害なガスが出ているわけでもない。むしろ清涼とした場所だと霊夢は感じた。

霊夢は移動しながら、件の虫妖怪について考えていた。

そしてふと、永夜異変の時の事を思い出した。

あの時——あの終わらない夜の異変の時に自分と八雲紫に弾幕勝負を仕掛けてきた妖怪がいた事を。

(確か名前は……リグル。リグル・ナイトバグとかいう名前だったわね)

虫を操る程度の能力を持った妖怪。

今回、村を襲ったのは虫の妖怪だという。ならばこの件に絡んでいる可能性は非常に高い。

首謀者ならば今度ばかりは看過できない。弾幕勝負ではなく完全な討伐だ。そう考

えながら霊夢は森の中を進む。

霊夢がしばらく森の中を探索していると、地面に何かが這ったような跡がある。とても大きい——人間よりも大きいな何かを通った跡だ。だがそれよりも目に付く物がある。

血痕だ。

這った跡と共に森の奥へと点々と続いている。しかし量は大したことはない。もしかしたらまだ生きているのかもしれないと、霊夢は血痕の跡をたどり、森の奥へと進んで行った。

そして霊夢は空けた場所に出た。

そこは湖がある——時が時であったならば、きつと素晴らしいリラックスエリアとなっていただろう場所であった。

そして霊夢はそこで見た。途轍もなくでかい虫の化物を。

「——ひい……た、助けて……」

その虫の出で立ちちは、まるでサソリを思わせるような形をしていた。しかしどう見てもサソリではない。蜘蛛のような強靱な足に、そこから触手のようなものまで生えてい

る。さまざまな昆虫が合わさったような混合的な妖怪なのかもしれない。

そしてその混合虫の挟みに人間の男性が挟まれている。

男は酷く怯えている。

そして、そんな男を混合虫の上から冷静に観察している小さな少女がいた。

緑色のショートトの髪に、羽を思わせるような黒いマント。リグル・ナイトバグだ。

「——助けて?……何言ってるのさ? 君さ、この子の子供たちを殺したよね? ——何で?」

「ち、違うツ! 俺じゃ——!」

「しらばつくれなくて。数日前、ここで君の姿を蛭たちが見かけてるの。犯人は君だよ」

「ほ、蛭!?!」

「ええ。あ、言ってるなかったっけ? 私、虫たちと意思の疎通が出来るの。そう言う妖怪

だからね」

「よ、妖怪ツ!?!」

「——で、なんで殺したの? 理由を聞かないうちに殺したら、一方的に私たちが悪いって事になっちゃうからさ……あんたをここに連れてきたのもそのため。人間たちの村じゃろくに話も出来ないからさ、きちんと話しの出来る場所に連れて来てあげたの。——

——で、なんで？」

「か、勘弁してくれ！ 許してくれッ！」

「許す？——何を言っているの!?! 何をもって許せと言うのッ!?!」

リグルが怒鳴った瞬間、混合虫の挟む力が強まった。

男はうめき声をあげながら許をこうた。だが、男が謝罪すればするほど、リグルにとつて火に油を注ぐ行為となる。そしてそれは男を挟んでいる混合虫もおなじだ。徐々に挟む力が増していく。男は恐怖と激痛でうめき声をあげている。

さすがにもう限界であった。

霊夢は様子見を止めて、リグル達の前に姿を現した。

「それ以上は止めなさい」

「——ツツ!?!」

霊夢の姿を見たリグルは驚愕した。

いつの間に、そしてどうしてここに——いや、それよりも彼女は博麗の巫女だ。

傍から見ればこの光景は、自分たちが人間を襲っているように見える。そのように捉

えられてしまったら、討伐される恐れがある。

勝てるわけがない。

彼女は幻想郷のシステムそのものなのだから。

永夜異変の時に何も知らずに弾幕勝負を吹っ掛けたが、呆気なくやられた。その時の記憶がリグルの中に流れ出した。

「み、巫女様！ 助けてください！」

怯えるリグルに対し、男はこれで助かると、安堵の顔をした。

だが、リグルは怯えながらも男の前に立ち、霊夢と相對する事となった。

「——こ、この男を助けに来たの？」

「まあ一応ね。で、その男性を解放しなさい。そうすれば、未遂って事で今回は見逃してあげるから」

言い返せば、解放しなければ討伐すると言っている。リグルにもそれが理解できていた。リグルは震えた。目の前の強者に対して。

だが、それでもリグルは応じなかった。いや、応じられなかった。

「だ、駄目……駄目ッ！　この男は……こいつだけは返せない！」

リグルは震えながら霊夢を睨みつけた。

対し、霊夢はため息をつきながら言葉を返した。

「一応、聞くけど……村を襲ったのはその男性を探すため？」

「そ、そうよ！　で、でも他の人間たちには危害は加えていないわ！　家とかは確かに壊しちやっただけど、それでも誰も死なせていない！　大怪我した人もいない筈よ！　畑も家畜も荒らさなかった！」

「まあ、確かにそうだったけど……で、その人はあんた達に何かしたわけ？」

「したわよッ！　こ、この男は——この男は、私の仲間の……この子の子供を殺したのよッ！　何も人間に対して悪い事していなかったのに……こいつはッ！　この男は笑いながら殺したのよッ！　だからこれは復讐なのッ！」

「復讐？」

「そうよッ！　復讐よッ！」

靈夢はふと男の顔を見た。

男は怯えるように靈夢から目をそむけた。そしてそんな男の反応を見て、靈夢はリグルが言っている事が本当なのだという事を確信した。

そしてリグルは同意を求めめるかのように靈夢に対し叫んだ。

「解ったツ!? 今回ばかりは正しいのは私たちなんだから! 解ったならここから出てって!」

「ふゝむ……」

リグルは何の反論もしない靈夢に対し、説得が成功したかと考えていた。だがそれは違っていた。靈夢は少し唸った後、なんの躊躇いも無く言った。

「——断る」

「……ええ?」

余りにもハッキリ言うものだからリグルは呆気に取られていた。

だが霊夢はそんなリグルを介さず、言葉が続ける。

「聞こえなかったの？ 私はその男性を助けるよう依頼を受けたのよ。あんた達の事情なんて私の知った事じゃない。さつさとその人を開放しなさい。でなければ貴女達をこの場で討伐するわよ」

「ちよ……き、聞いていなかったの!? この男は私の仲間を殺したのよッ!」

「聞いていたわよ。聞いた上で言ったでしょ？ あんた等の事情なんて知った事じゃないって。大体、この幻想郷で人間を襲い、殺してしまえばどうなるのか……そんな事も知らないのかしら？」

きつぱりと霊夢は言った。

地団駄を踏むリグルが憤怒をよりその顔に表せて言葉を重ねるが、霊夢は頑なにそれを拒むばかりだった。

ついには涙声を張り上げながら叫んだ。その姿はまるで幼子が痲癩を起している姿に似ている。

「な、なんで……なんでなのッ!? 何で人間ばかりッ! ——お前たち人間はいつもそ

うだツツ!!」

「……『いつも』?」

『いつも』、と漏らしたリグルに、霊夢は僅かばかりの引っかかりを感じ、反射的に尋ね返してしまった。

リグルは涙声で叫び続ける。

「そうよッ! 人間はいつもいつもいつもッ! 人間は私たち虫妖怪を退治しても何も咎めを受けないッ! そして私たちが人間を襲うと一方的に悪者扱いッ! この前、人里の子供が言ってたッ! いや子供だけじゃない大人たちもだッ! 虫の妖怪は気持ちが悪いつて! いなくなれば良いつてッ! そうすればもつと平和になるとか言っただんだ! なんで私たちがそんな事言われなくちゃいけないのッ!? 何で知らない人間たちにここまで言われるの!? 私たちは何も悪い事なんかしていないのにッ! そして人間が私たちに酷い事をして誰が悪い事だつて言わないッ! こんなあんまりだよッ! 不公平よッ!」

リグルはなにかが溜まっていたのだろう。

鼻水をすすりながら、嗚咽を漏らし続けている。

「不公平……ねえ」

「不公平じゃなかったらなんだって言うのよッ!? 霊夢さん、確かに虫の妖怪の中には人間に害を与える者たちもいる。だけど、この子のように言葉は話せなくても、知恵を持って人間に害を与えなよう生きている妖怪だっているのよッ! 霊夢さん聞いて。虫の妖怪の中には人間の害になるどころか、むしろ外敵から守ろうとしている妖怪だっているのよ! でもその子たちは人間からしてみれば醜悪な外見をしていてね、ただ気味が悪いとか言われて殺されたのッ! うんうんッそれだけじゃないッ! 畑の近くに現れただけで、森まで追いかけて来て、巣どころかコロニーまで根絶やしにされた事もあった! それなのに、人間に仕返ししようとするばすぐに悪者扱いッ! なんで人間は私たちを差別するのッ! 私たちだって生きてるのに……! 必死で生きてるんだ! なのに何で私たちだけこんな目に合わなくちゃいけないのッ!? こんなのおかしいよッ!」

「へえ……」

己の内に秘めた激情を乗せて長々と吐き続けるリグルをよそに、霊夢が抱いたのは意

外にも哀れみと言う感情だった。

それと同時に、目の前のリグルを感心した。

リグルは賢い。そしてその賢さが自分たちの置かれている現状、あり方を明確に認識している。

妖怪と人間。

確かに彼女の言う通り、この幻想郷は人間にかなり有利な法が存在している。

人間を襲ってはならない。人間に危害を加えてはならない。人間の生活を脅かしてはならない。妖怪同士で勝手に暴れまわらない、人間が困るから――。

しかしそれでいて人間が妖怪に対し、何かしたとしても罪にもとわれないし、そもそも人間が妖怪を討伐してはならないと言う規律が存在しない。

そして仲間の子供が殺されたと言う事がきっかけとなって、今まで我慢していた部分が露呈してしまったのか――現実が背中を突き立てる不条理さに抑え込んでいた感情を爆発させたリグルは泣き崩れるように叫んだ。

霊夢はそんなリグルを見て、本当に哀れだと思った。

そして教えてやらなければならぬと考えた。

人間と言う物を……。

後編

「——リグル。私たち人間は何も貴女達、妖怪を差別している訳じゃないわ」

「なッ!? こ、この期に及んで何を言っているの! どう考えたって差別じゃないッ!」

「いいえ。違いわ。これは『差別』ではなく、『区別』よ」

「く、区別?」

差別ではなく、区別と——そう霊夢は言い放った。

それに対し、リグルの顔には困惑と疑念を織り交ぜた実に小難しい顔をしている。

「区別が差別とどう違うって言うのよ。同じじゃない」

「いいえ、違いわ。差別と言うのは不当な扱いをしたり、見下したり、侮蔑の感情が含まれている事を指すの。区別は言葉通り『分け隔てる』事を指す。私たち人間はね、妖怪に限らずあらゆる生き物を殺して良いモノと悪いモノに分け隔てているのよ。そこに侮蔑の感情は無い。差別してるから虐げてるんじゃない。あんた達を『殺しても良い

側』に分別しているから殺すのよ」

「な、な、な……ツツ!!」

霊夢の冷淡な発言にリグルは言葉を失った。そして怒った。

生き物を分け隔てる？

なんとと言う傲慢な事か。リグルの内の中に、人間に対する欺瞞で溢れかえった。

「なんで……なんで人間は勝手に私たちを分別するの!? 私たちは生きてるんだ! 勝手に殺していい命なんかある筈がないッ! それなのに殺して良い側と分別するなんて……人間は傲慢だッ!」

リグルの叫びに霊夢はため息をつきながら返した。

「貴女……あの夜雀と知り合いだったわね。あの八目鰻屋の」

「八目鰻……ミステリアの事?」

「ああ。確かそんな名前だったわね。そこで貴女は鰻を食べたはずよ?」

「……ええ?」

「鰻や魚は私たち人間の食料でもあるけど、それは貴女達も変わらない。貴女は人間を傲慢だと言ったけど、貴女達だって他の生き物の命を奪って己の糧とする——それなりの業と言う物があるでしょう?」

「え、いや……だって……それは……」

リグルは顔を濁らせた。

確かに自分たちも他の生き物たちの命を奪って己の糧にする。だがしかし、命を奪うのはあくまでも食べるため。それは生命としての当たり前の行動だ。

そして、それが人間が他の生き物たちと妖怪に身勝手な価値を押し付ける理由にはならないとリグルは信じていた。

自分たちが殺すのは生きるため。まっとうな理由がある。目の前で震えている男のように快樂の為だけに命をもてあそんだりする事は絶対にあり得ない。

だからこそ、リグルは反論の声を上げようとした。

人間たちと自分たちは違うと。

それはただのヘリクツだと。

しかし、リグルが声を出す前に、霊夢の断言がリグルの反論を遮った。

「しかしそれは間違いじゃない。強者は弱者を虐げる権利がある」

霊夢は何の迷いも無くそう断言した。

そんな霊夢を見て、リグルは震えた。

彼女は本気でそう言っているのだと。

だがそれ以上にリグルを震わせていたのは、霊夢の口にする言葉の言いようのない説得力だった。

「リグル。貴女はどうにも勘違いしているようだから、この際教えておいてあげるわ。

貴女の思考の内にある根本的な間違いと言うのを……」

「ま、間違い？——間違いっているもんか！ 私は間違いっていない！ 人間だって、同じ人間を殺したら罪に問われるでしょうッ！ だから人間が私たちを殺したら……」

「いいえ。それは違う。貴女は間違ってるわ。貴女は私たち人間を自分たちと同列だと考えている。それがそもそもの勘違いなのよ。この幻想郷で……妖怪と人間が定められたルールの中で生きている貴女なら解るんじゃない？ 『妖怪は絶対に人間には勝てない』って。はるか次元の彼方に住んでいる生き物であると。そう薄っすらと気付いている筈よ。今の幻想郷のあり方、そしてスペルカードルール。全ては人間を守るためにあ

るモノじゃない。全ては貴女達妖怪を守るために存在している。賢い貴女なら気付いていたんじゃない？」

幻想郷のあり方。幻想郷は忘れられた者たちが集う世界だ。妖怪たちは人間たちに忘れられ、必要とされなくなった。だからここにいます。

だが、もし、もしも仮に妖怪たちが人間よりも強かったら……絶対に無視出来ないような存在であつたならば、そもそも幻想郷なんて世界は生まれてすらいない。

詰まる所——妖怪は人間には勝てないのだ。だから幻想郷にいるのだ。

そしてスペルカードルール。これは人間が妖怪たちと対等に戦えるために作られたルールとされている。

しかし実際は違う。

スペルカードルールは人間を守るためではなく……妖怪の力をこれ以上落とさないために作られたルールだ。

本当は人間を守るためにあるんじゃない。妖怪を守るためにあつたルールなのだ。

リグルは気付いていた。本当は気付いていたのだ。

この幻想郷のは一見、妖怪が支配しているように見えるが……実際は人間が全ての頂点に立っている事を。

他の低級妖怪や差別と言った事に疎い妖精では気付きもしない事実。

リグルはその賢さゆえ、うすうす気づいていた。

「そ、そんなの……そんなの解りきつていたさ。人間は強いって。でもツそれでも私たちは生きてるんだッ！　なんでそれが人間には解らないのッ!?」

「まだ理解出来ないの？　貴女はどうして強者たる人間に意見が通るほど、対等な立場に己を置いているの？　貴方が他の生き物の命を喰らう時、その生き物の抗いを存分に見て来た筈よ？　言葉を交わす事は出来なくとも、必死の抵抗を見せていた筈。貴女は一度でもそれに耳を傾けた事はある？　貴女は人間に自分たちを理解しろと、自分たちは生きているんだと言うけど、貴女は同じ事をやった事がある？　一度でも”殺す”命に対して耳を傾けた事がある？」

「それは……」

ある筈がない。

そうだと。魚を食べる時も、鰻を食べる時も、捕まえた時思いつきり抵抗された。しかしそんなの目にもかけた事ありはしない。それどころか抵抗された事を楽しいとすら感じた事もある。

人間もそうなのだ。己よりも弱い生き物に対して、果てしなく残酷になれる。そして妖怪は人間よりも弱い。だから残酷になれる。

リグルが意気消沈すると、後ろにいる混合中もまた元気がなくなってきた。

霊夢の言葉が理解できているのかどうかは不明だが、リグルに何かしらの変化があった事を察知していたのだろう。

そしてリグルは混合虫に挟まれている人間を見た。

男はいつの間にか気絶しており、ぐったりとしている。

リグルは男を見ると、意気消沈していた性根が再びもどりだした。

霊夢の言っている事は正しい。

だがこの人間だけは許せない。この人間は生きる価値がない存在だと。

「に、人間は強いさ……。け、けど……。けどッ！ この男は本物のクズだッ！ 生きる価値の無いゴミだッ！」

「その何が問題なの？」

「——え？」

霊夢の意図がまるで読みとれず、リグルはただ困惑するしかなかった。

「確かにその男性は、あまり褒められるような性根の持ち主では無さそうね。貴女の仲間の子供を殺したのも多分、事実なんでしょう。——でもそれがどうかしたの？　まさかと思うけど、『だから殺しても良い』なんて考えているんじゃないでしょうね？」

「そ、そうだよッ！　こいつは生きる価値なんかないんだッ！　だから私たちが……」

「はあ……リグル。こんな事、とても残酷だから言わないでにおいてあげただけ……貴女の意味も堅そうだからハッキリと言ってあげるわ」

「な、何を……」

「いい？　リグル。殺された貴女の虫とその男性の命——『まるで釣り合いが取れてないのよ』」

「なん……ですって？」

「聞こえなかったの？　貴女の虫とその男性では命の価値が違いすぎると言っているの。人間の命は貴女達よりも尊い。例えばその男性が何千、何万という虫を殺したとしてもまるで釣り合わない。例えばその男性がクズだったとしてもそれで彼の存在意義が否定される事は無い。貴女達に彼を裁く権利なんて最初から無かったのよ」

「——ツツツ?!」

「リグル。『区別』は『差別』なんかよりもよっぽど残酷よ。貴女達が危険な存在だと認

識されてしまった以上、貴女達と人間はすでに共存を見限られているの。差別だけだったら、どこその寺のように平等を唱える人間が現れたり、情が移って情けをかける者たちもいるのかもしれない。だけど区別は違う。大半の人間が貴女達を殺しても良い存在だと認識してしまった。もう貴女達はそこまで来てしまったのよ」

リグルがどれだけ虫たちが人間の為に働いているか、それを唱えたとしても人間には理解できない。

そもそも人間は、全ての虫たちの性格を把握できるほど注視もしていないし、視野も広くは無い。

それゆえに、人間は情報を整理するために物事を区別する。分け隔てて考える。

そして彼女たちは殺しても良い存在だと区別されてしまっている。

誰が悪いわけでもない。ただ運が悪いだけだ。

そういう存在になってしまったのが彼女たちの不運だった。

「さ、もう良いでしょう。さっさとその男性を返しなさい。そうすれば貴女達を見逃すと言っているのよ？ それともここで一戦交える？」

「ぐッ!?!」

「例え、ここで私から逃れられたとしても、その男性に手出しをすれば人間たちは今度こそ貴女達を皆殺しにするわよ？ 良いも悪いも無い。ただ存在している。それだけの理由で残酷に冷酷に殺せるわ。それが人間なのだから。——で、どうするの？ 全ての虫たちの命を賭けて私と勝負する？」

目の前の巫女には迷いが無い。

こちらが戦闘の意を見せたら躊躇いなく、情を見せずに向かって来るだろう。

男を人質にした所で逃げられない。もしもそんな事したら他の虫たちも人間たちに殺されるかもしれない。

だがリグルには霊夢を倒す実力は無かった。

後ろにいる混合虫も、見た目がおぞましいだけで実力は大したことは無い。

きっと霊夢はそれすらも分かっているのだろう。

だからリグルには選択肢が残されていなかった。

男を引き渡すと言う選択しか……。

「わ、分かった。こいつを……引き渡すよ……」

リグルは菌を食いしばりながらそう言った。

霊夢は肩をすかしながら混合虫の方へと歩み進め、男を引きとった事を確認した。

霊夢はリグルをしり目にこう言い放った。

「リグル。私からの善意として言っておくわ。人間を怨むなどは言わない。けど人間に手出しする事だけは止めなさい。人間は貴女達を忌み嫌っている。自分たちに何か不利益になるような事があったら何のためらいも見せずに貴女達を殲滅する。子供の事は……運が無かったと諦めるしかないわね。これからは人間に余り関わらないようにして生きなさい」

男を背負いこみ、霊夢は宙に浮かびあがった。

そしてリグルに背を向けてその場から立ち去って行った。

背後からリグルの嗚咽が聞こえてきた。喉が潰れるのではないかと思わせる位の叫びだった。

霊夢はリグルの嗚咽を耳にいれながら村へと急いだ。

もうリグルは『区別』と言う理不尽さを受け入れるしかない事を知っただろう。

この先、彼女には希望が無くとも、一匹の妖怪として生涯を達成し得る事になるかも

しない。

しかしそれが彼女の幸せと言えるかどうかは測り知れないが……。

霊夢は思った。人間が付けた生き物の価値と言う物は酷く残酷な物であると。今背中に背おられている男性は人間として生まれ、生まれながらに全てを掴みとる権利を持つている。

方や一方で、どれほど努力しようとも、どれだけ叫んでも、決して覆らず見えない壁のような物に押し付けられた種もいる。

霊夢はなんとも言えないしがらみを感じながら森を脱出するのだった。



後日談と言う事になるのだろう。

あの後——村に戻って来た霊夢は、大きな歓迎を受けた。すでに死んでいたと思われていた村長のせがれを助けただけでなく、森の中にいる虫妖怪を追っ払ってくれたのだと。

霊夢は村が襲われた理由。男性がした行為について全てを話した。そして謝礼を貰った後、さっさと神社に帰って行った。

そしてせがれが起き上がると、村の人間たちは皆、せがれの事を褒め称えた。

あんな危険な妖怪の子をやっつけるとは大したものだ。子供がいたらあんなのが何匹になって村に来るか分かったものではない。良くやった。

村人は総出でせがれを褒め称え、次の村長にしようと言う声も上がった。男は一躍村の英雄になったのだ。

そして――

蛭が舞う綺麗な湖の森には、もう二度と蛭が現れなくなつた。